笛吹嘉一郎の職能と茶室の全体的把握のための基礎的研究

BASIC STUDIES FOR A GENERAL COMPREHENSION OF THE SKILLS AND THE TEA ROOMS OF KAICHIRO USUI

松本 康隆*

Yasutaka MATSUMOTO

Kaichiro USUI is a designer of modern tea rooms, and the some he designed for OKOCHI VILLA and Ichizo KOBAYASHI's SOKU-AN let us recognize importance in modern times. After World War II, he designed OMOTESENKE' branch office which is a base in Tokyo of OMOTESENKE, and enlarged OMOTESENKE residence in Kyoto. So he is also important as a Designer who present OMOTESENKE after the war. But, up to know, there has been no study about the whole life work of Kaichiro. The purpose of this paper is to settle the fundamental basements for the futures studies about him.

In this study, by first piecing out Kaichiro's texts, plans, and interviews with someone who related to him, we want to make synthesis of his skill as a Sukiya-shi. By listing up his architecture, we understood the where it spread in the different regions, and the approximate proportion of the tea rooms in his all work.

Keywords: Kaichiro USUI, Modern, Tea-room, SUKIYA-Daiku, Sukiya-shi
笛吹嘉一郎, 近代, 茶室, 数寄屋大工, 数寄屋師

1. 研究の目的

近代以降、利休の歴史的重要性が強調されるとともに、利休の直系の子孫とされる表（不審菴）、裏（今日庵）、武者小路（官休庵）の三千家を中心とした近代的家元組織がそれぞれ構築、拡大してきた。そして、現在も茶道界において最も影響力のある流派はこの三千家であると言える。その三千家の近代を代表する茶室の作り手として、表千家では平井家や笛吹嘉一郎、裏千家では木村清兵衛、武者小路千家では木津宗詮などを挙げることができる。このうち、筆者は、現時点で確認できる木津宗詮の著作と建築作品をリスト化して、その職能と茶室の全体的把握を試みた^{注1)}。本稿では、笛吹嘉一郎を対象にして、同様の考察を行う。

嘉一郎に関する先行研究としては、中村昌生『数寄の工匠』^{注2)}を挙げることが出来る。「中間報告」との断りはあるが、中村博士はここで、近代から現在までの多くの「数寄の工匠」たちの系譜を明らかにし、作品及び作風を研究、紹介している。嘉一郎はその「工匠」、或いは「数寄屋大工」の一人として配置されている。中村博士は、まず嘉一郎が平井家の流れをひく大工であることを明らかにし、次に嘉一郎の独自性を考察している。そして嘉一郎の目標は「工匠」として独自の数寄屋師の立場を完成することに向けられていたに違いない。」としている。作品としては大河内山荘を取上げ、「数寄屋

造を基調とし、また数寄屋師ならではの柔軟な姿勢と技法が展開されている作品」と述べ、「工匠」或いは「数寄屋大工」の中の「数寄屋師」という独自性を指摘している。

嘉一郎は、戦前には大河内山荘^{注3)}や小林一三の茶室^{注4)}など、著名な数寄者の茶室を数多く手がけており、戦後には表千家の東京出張所、京都不審菴の増築などを行っている^{注5)}。そして、中村博士も触れているように、嘉一郎は自らを「数寄屋師」と規定していた。

なぜ嘉一郎は「数寄屋師」と称し茶室を建て続けたのか、具体的な茶室を通して作風を読み取り、その作風からの解釈に重きを置いた若干の考察は既に行った^{注6)}。本稿では、嘉一郎に関する文献史料や図面史料、及び関係する人々からの聞き取り調査を通じて、嘉一郎の「数寄屋師」としての職能を考察する。次に、現時点で確認することができた嘉一郎による建築作品リストを作成し、引き続き職能の考察と共に、地域的な分布や建築作品の全容を把握するための基礎的作業を行う。最後に、明らかにした職能および作品の全体像から若干の考察を試みたい。

2. 笛吹家について

笛吹家の過去帳によると、表1のように嘉一郎より3代前の長八まで確認する事ができる。嘉一郎の実娘にあたる笛吹春子氏^{注7)}に

* 京都工芸繊維大学大学院 博士後期課程・工修

Graduate Student, Kyoto Institute of Technology, M. Eng.

よると、もとは東京の大工であつたらしいが、数寄屋専門であつたかどうかは定かではない。この長八が新七の代に関西に来たといわれ、新七は柴田清七という人物の長男嘉三郎を養子に迎える^{注9)}。そして嘉三郎の息子として生まれたのが嘉一郎である。嘉三郎は、表千家出入りの「数寄屋師」^{注9)}として知られる平井家で働いていたが、その後独立したらしい。嘉一郎は嘉三郎の指導の下、「数寄屋師」としての素養を身につけたようである^{注10)}。

表1 笛吹家の代々

名前	生没年
長八	～1857(安政4)
新七	1832(天保3)～1904(明治37)
嘉三郎	1873(明治6)～1922(大正11)
嘉一郎	1898(明治31)～1969(昭和44)
蔵	1928(昭和3)～1990(平成2)

3. 笛吹嘉一郎の文献・図面史料とインタビュー

文献史料

現時点で確認できた嘉一郎による文章は、以下に挙げた「ご同慶の至り」のみであり、嘉一郎が文章を書くことは殆どなかったと考えられる。

「ご同慶の至り」の文章は昭和34(1959)年6月25日の『建設写真新聞』に、表千家増築工事竣工記事の中に掲載されたものである。ここで嘉一郎はまず「お茶のむつかしさは伝統に生きその道を悟ることにあると思う」と茶道の立場を最初に述べ、次に茶道における「外国の模倣の入込ない厳しさ」を説いている。そして「茶室建築」はその厳しさが必要であり、当時の茶室建築を「近代建築の進化とともにその厳しさのない自由な意図のもとに設計されていることが多い」と批判している。表千家増築工事に関しては、「一部鉄筋コンクリート建物を挟む防火構造」としなければならなかったが、苦心の末「見苦しい線を出さず美事に竣工した」と述べている。

嘉一郎は、ここで茶道の「厳しさ」を説いているが、それは「自由」と対置された概念であることがわかる。そして、作品に実現させる「厳しさ」とは、鉄筋コンクリートなどの「見苦しい線」を出さないことであると捉えることができる。

図面史料

図面を中心とした史料は笛吹春子氏、及び田尻晶英氏^{注11)}によって所蔵されている。現時点で笛吹家に1182点、田尻家には5点、計1187点の図面史料の存在が確認できた^{注12)}。

図面史料を見渡すと、設計している対象は住宅、茶室、庭などが見られる。このうち、庭には露地の外腰掛、門、戸、飛石、蹲踞、石灯籠、樹木などの表記が見られるが、石や樹木の配置などに寸法の表記は見られない。彩色などもなく、シングルラインで描かれているなど、木津宗詮図面と比較しても^{注13)}、庭の設計図としては簡略的なものと言うことができる。また、木津宗詮図面にみられるような、石灯籠のデザインなども見られない。つまり、茶の施設の全体的な計画を視野に入れているとはいえ、やはり大工仕事を主体とした設計であつたということが出来る。

インタビュー

春子氏からの聞き取り調査によると、施主の紹介について、西尾

真、生方貴一、徳禅寺和尚などに大変お世話になったとのことであつた^{注14)}。今後、遺構の調査と共に、施主の紹介についての実証作業が必要である。また、施主の獲得については、上記の紹介だけではなく、小林一三関係の茶室や大河内傳次郎の山荘など、知名度がありかつメディアに載る作品を手がけたことなどもプラスに働いたと思われる。

さらに、自ら茶道の稽古を行い^{注15)}、自会の茶事・茶会への招待、他会への参加や世話を通じて顧客が広がり、繋がりも維持されている点も大きいと思われる。中村博士は、「晩年の氏は、作陶に興じたり、釜を懸けては客を呼んで楽しむ日が多かった。」と、晩年の茶会について述べているが、春子氏が母親(嘉一郎夫人)から聞くとところによると、嘉一郎は戦前から自邸茶室「無孔庵」で茶会を開いていたらしい^{注16)}。戦中の強制疎開によって、自邸及び茶室「無孔庵」は取り壊され、以後、自邸での茶会は開けなくなったが、大徳寺玉林院での月釜茶会「南明会」^{注17)}のメンバーに戦前から加わっていたらしく、定期的に茶会を催していたようである。

つまり、嘉一郎にとって茶会は、晩年の心の余裕が生み出したものではなく、施主の獲得にとっても初期の頃から欠かせないものであったと考えられる。そして、それだけでなく、先に述べたような茶道の「厳しさ」を追求することこそ、本来の目的があつたように思われる。

4. 笛吹嘉一郎の建築作品

建築作品一覧

これまで見てきた図面史料に加え、笛吹春子氏、吉村龍三氏^{注18)}、田尻晶英氏をはじめ、関係する人々への聞き取り、及びその他文献資料などから、現時点で物件名が明らかで笛吹嘉一郎作であると確定出来たもの、或いはその可能性が高いものを表2の一覧にまとめた。一覧には、まず年代が明らかなものを、先に年代順に並べ、続いて年代が不明なものをアイウエオ順に並べた。また、前者の年代順の一覧には、春子氏の聞き取り調査から得た情報から、自宅住所の変遷を組み込んだ。^{注19)}

建築作品の地域分布

物件名が明らかで作品の年代が判明したものは109件、建築年代がわからないものは58件確認することができた。このリストの中から物件の所在を都道府県別に数の多い順に見ると、京都が30件で最も多く、東京の20件が次に続く。以下順に大阪(19件)、山口(15件)、兵庫(12件)、広島(10件)、福岡(9件)、和歌山(6件)、三重・岡山(各3件)、静岡(2件)、北海道・青森・福井・岐阜・奈良・香川・佐賀・大分・中国・インド(各1件)となっている。地域が不明な物件は28件である。

やはり京都を中心に京阪神の作品が多いが、東京や山口、広島、福岡のものも多い。その他、数は少ないが、北海道から九州まで、全国的に作品を手がけていること、戦時下の旧外地や、戦後の大使館における茶室も手がけていたことがわかった。

作品リストからみる設計内容

設計の内容をみると、167件中、これも判明する限りであるが、住宅は31件、茶室は146件、庭は55件、商業施設は6件となる。

表2 笛吹嘉一郎による建築一覧

物件名判明・年代判明・年代順			(記号 □:住宅、別荘 ○:茶室 △:庭 ◇:商業施設 ×:その他)			
番号	現状	物件名	建築年	所在地	設計内容	茶室の形
～S.20 上京区出水通りの家						
M. 31. 10. 16生						
1	無	笛吹嘉三郎自邸建て替え 茶室増築「無孔庵」	T. 12	京都：京都市上京区出水通東入	□○△	●三畳台目
2	有	加田別邸茶室 「不老庵」「曉月亭」	S. 3～6	和歌山：和歌山市藍ノ丁	○	●三畳台目 ●八畳
3		瀬川邸茶室	S. 6	不明	○	●不詳
4	無	阪急百貨店第四期 六階敷寄屋「福寿荘」	S. 11	大阪：梅田	○△◇	●五畳+板半畳 ●十畳半「忘筌寫」
5	有	小林邸茶室「即庵」 (阪急、東宝)	S. 11～12	大阪：池田市	○	●三畳台目+土間
6		田村家茶室	S. 12	大阪：浜寺(不詳)	○	●五畳半 ●十畳+上段二畳「残月亭」
7		中村邸	S. 12	不明	×	—
8		外山邸増築	S. 13	大阪：濱寺(不詳)	□○	●五畳 ●十畳
9	有	大河内山荘	S. 14	京都：京都市右京区嵯峨小倉山 田淵町	□○	●三畳半「有楽斎好如庵寫」
			S. 27		×	—
			S. 41(宴会場)		×	—
10		松羅荘御茶室	S. 14	岡町(不詳)	○	●三畳台目「原双好」 ●八畳or六畳
11		多井邸茶席	S. 14	京都ではない(不明)	○	●三畳半台目「原双好」
12		大寧寺 「隠寮」「位牌堂」	S. 14	山口：長門市深川湯本門前	□○△	●三畳台目「利休」 ●四畳半 ●十畳 ●八畳「寛々斎好床」
13		安部邸茶席	S. 15	広島：福山市(不詳)	○	●三畳台目「原双好」
14		岡本邸茶席	S. 15	不明	○	●二畳中板「江岑好」
15		黒川邸 門 (虎屋主人)	S. 15 (表門：冠木 S. 15(高堀門))	東京：不詳	×	—
16		白木邸	S. 15	東京：不詳	□	—
17		白木別邸	S. 15	山口：不詳	□	—
18		田村駒邸日本館	S. 15	兵庫：西宮市甲子園(不詳)	□○	●五畳 ●五畳台目 ●七畳 ●十畳+上段二畳「残月亭寫」
19		堂本邸茶室 (日本画家：堂本印象)	S. 15	京都：京都市北区平野上柳町	○	●四畳半
20		菅原邸茶室	S. 16	福岡：福岡市(不詳)	○△	●二畳台目向板、向切 ●四畳半
21	有	大徳寺玉林院「洞雲庵」	S. 16	京都：京都市北区紫野大徳寺町	○△	●三畳「桑山御好」 ●八畳台目
22		田村邸茶室	S. 16	静岡：熱海(不詳)	□○△	●四畳半台目「遠州好山雲床寫」 ●八畳
23		古川邸改造	S. 16	広島：不詳	□○△	●十畳+上段二畳 ●三畳台目か
24		山口邸茶室	S. 16	福岡：不詳	○	●二畳台目中板 ●四畳半
25		山口邸茶室	S. 16	大阪：池田(不詳)	○	●四畳半
26		安部邸茶室	S. 17	広島：福山市(不詳)	○	●四畳半→三畳台目 ●九畳
27		坂内邸床改造	S. 17	京都：不詳	×	—
28		長谷寺軟喜院 本堂附風茶席	S. 17	奈良：桜井市初瀬	○	●四畳半
S.20頃～23頃浄福寺松声院						
S.23頃～31頃浄福寺長徳院						
29		七郎庵	S. 23か	不明	○	●二畳台目 ●八畳
30		山水園(主人：中野仁 義) 「不鳴庵」 「山月亭」	S. 25～27 S. 38(増築)	山口：山口市緑町	○◇	●三畳台目 ●十畳+上段二畳 ●二畳台目向切 ●五畳
31		大原女家本舗改造	S. 26	京都：(不詳)	○△◇	●三畳半「原双好」
32		小松館	S. 26(新館) S. 28(増築)	山口：長門市深川湯本(不詳)	◇ ○◇	×
33		八馬邸敷寄家	S. 26	兵庫：宝塚(不詳)	○△	●移築茶室：不詳 ●三畳台目 ●三畳台目 ●八畳
34		揚井邸茶室	S. 27	東京：不詳	○△	●一畳台目向板、向切 ●四畳半
35		池田邸茶室	S. 27～28	玉島(不詳)	○△	●二畳台目向板、向切 ●四畳半
36		川瀬観光ホテル内茶室	S. 27	山口：下関市豊浦町大字川瀬	○△	●二畳台目向板、向切 ●四畳半
37		大徳寺孤篋庵 「大圓藏」再興	S. 27、28	京都：京都市北区紫野大徳寺町	○△	●三畳台目「不昧公御好」
38	有	田中丸邸茶室 (玉屋百貨店)	S. 27	福岡：福岡市中央区平尾	○	●四畳、柗床「吸江斎好」 ●十畳
39		徳禅寺「向東庵」	S. 27	京都：京都市北区紫野大徳寺町	○	●四畳半
40		永田宗伴邸茶室	S. 27	広島：不詳	○△	●四畳半 ●七畳

41		西松邸茶室「不朽庵」 (西松建設)	S. 27	東京：麹町（不詳）	○	●三疊中板	①228～230、⑥-17、岡田孝男『茶室平面集』1992
42		原田邸茶室	S. 27	不明	○△	●三疊半「原双好」	⑤-153u
43		藤澤邸茶室	S. 27	大竹町（広島か）	○△	●三疊台目	⑤-98p、⑦-11b
44		山根邸「花酔庵」	S. 27	広島：三原（不詳）	○△	●三疊半「有楽斎好如庵」 ●一疊台目、逆勝手向切、枱床	⑤-48c、94p、⑦-11b、13b、岡田孝男『茶室平面集』1992
45	有	表千家 不審庵東京出張所	S. 28～30	東京：千代田区麹町	□○△	●三疊+台目二疊「不審庵変形」、 「即中斎好」 ●八疊「松風樓」 ●八疊台目	①-25～43、197～201、204、⑥-12、14、⑦-117h裏、118h、151i～170i、⑧-162m～171m
			S. 44～45 (移築及模様替)		□○	●十疊	
46		鈴木邸増築	S. 28	山口：長門市東深川正明市	×	—	①-22
47		野村証券ビル「得庵」	S. 28	東京：中央区日本橋兜町	○	●四疊半	⑦-15c～28c、岡田孝男『茶室平面集』1992
48		萩野邸	S. 28	兵庫：姫路（不詳）	□	—	⑦-29d、35d、36d
49		松屋 大徳庵茶室	S. 28	東京：不詳	○△	●十疊半「忘筌寫」 ●十疊+上段二疊「残月亭寫」 ●四疊半「又陽席寫」	⑤-159v～163w、⑦-37e～42e
50		緑屋 新館	S. 28	山口：山口市湯田温泉	○△◇	●四疊半 ●四疊半	⑦-3a、5a、6a
51		山本邸茶室	S. 28	広島：不詳	○	●三疊台目「原双好」	⑦-3a、7a、8a
52		初波奈邸茶室	S. 29	東京：不詳	○△	●三疊台目 ●八疊+上段四疊台目「即中斎好」	⑤-54d、128r～133r、⑦-55g～57g、春子氏聞取り
53	無	藤田家東邸茶室	S. 29	大阪：大阪市都島区綱島町	○	●移築茶室：二疊台目+相伴席 (台目一疊+板間半畳)	田尻亥之助図面4点、岡田孝男『茶室平面集』1992
54		本川邸茶室	S. 29	不明	○△	●四疊半	⑤-36c
55		守分部	S. 29	岡山：岡山市（不詳）	□○△	●四疊半	⑤-164x、165x、177aa～179aa、⑦-3a、43f～53f
56		市橋邸	S. 30	福井：不詳	□○△	●三疊台目 ●八疊	⑤-106p、⑦-171j～185j、春子氏聞取り
57		金森幹太郎茶席	S. 30	岡山：倉敷市連島町（不詳）	○△	●三疊半「原双好」 ●八疊	⑤-180bb、⑦-149h裏、274p、275p
S.23頃～31頃 浄福寺長徳院 S.31頃～41頃 西尾邸							
58		井上邸茶室「凌花亭」	S. 31	大阪：池田市（不詳）	○△	●四疊半	④-75、岡田孝男『茶室平面集』1992
59		吉比為之助邸仏間	S. 31	大阪：堺市浜寺諏訪森町（不詳）	○	●三疊台目向板、逆勝手向切	⑤-40c、⑥-33～35、45、52、⑦-95h裏、97h裏
60		玉屋百貨店 四階茶室 (代表：田中丸)	S. 31	福岡：不詳	○	●三疊中板 ●八疊台目「碎啄斎好」	⑦-94h裏、141h裏、288s、岡田孝男『茶室平面集』1992
61		吉田神社移築茶室改造	S. 31	京都：京都市左京区吉田神楽岡	○	●三疊半「覺々斎好」	⑤-52c
62		観福寺茶室	S. 32	不明	○△	●三疊半「原双好」 ●八疊	⑤-70j裏、⑧-3
63	無	加田邸茶室	S. 32～35	和歌山：和歌山市土半町	○△	●一疊台目、向切「雲脚」 ●五疊半、逆勝手	⑦-267o～273o、⑧-182o～185o、加田文彦氏聞取り
64		汾陽邸茶室	S. 32	東京：不詳	○△	●一疊半+台目四疊 ●八疊	⑤-73j裏、⑥-11、28裏、⑦-289s、春子氏聞取り
65		岸信介邸茶室	S. 32	東京：渋谷区南平台町	○△	●三疊台目「原双好」 ●六疊台目	①-226、227、⑤-15b、16b、24b、24b裏、35c、37c、38c、41c、⑥-24、24裏、28、39、⑦-287s、290s～292s、岡田孝男『茶室平面集』1992
66		渡辺邸茶室	S. 32	香川：三木町（不詳）	○	●四疊半、向切	⑦-282r～286r
67		出光邸茶室 (出光興産)	S. 33	東京：不詳	○△	●二疊台目	⑥-40、⑥-6、岡田孝男『茶室平面集』1992、春子氏聞取り
68		上田邸茶室	S. 33	和歌山：不詳	○	●三疊台目「覺々好」 ●八疊台目	③-2裏、⑤-23b、70j、⑥-10、25
69		岡崎邸茶室	S. 31～33	福岡：北九州市八幡（不詳）	○	●三疊中板 ●八疊	⑤-167y、168y、⑥-16、⑦-2、296u～298u、岡田孝男『茶室平面集』1992、春子氏聞取り
70	有	表千家 不審庵増築	S. 33 (増築)	京都：上京区寺之内通堀川東入	○	●八疊 ●十疊	①-133～140、143～196、③-63、⑤-57f、78i、81i、184ee、⑥-42、48、49、⑦-220k、224k、⑧-76g裏、106j～122j
			S. 36 (改造)		×	—	
	有		S. 41 (表門)		×	—	
71		左橋宗■依頼茶室	S. 33	不明	○	●四疊半	⑧-10
72		伏原邸	S. 33	不明	○	●六疊	⑧-5
73		竹中邸 (竹中工務店)	S. 33 (茶室)	兵庫：神戸（不詳）	○	●三疊中板「知心斎好」 ●六疊台目「碎啄斎好」	①-13～21、⑧-19、20、32、85h～95h-1、岡田孝男『茶室平面集』1992
			S. 41 (仏間)		○△	●仏間：八疊	
74		インド日本大使館内茶室 「碧庵」	S. 34	インド：ニューデリー	○	●台目四疊向切 ●八疊	笛吹家所蔵アルバム、『毎日新聞(京都版)』1959.2.25、久田宗也『重春』、春子氏聞取り
75		北川邸茶室「一喃庵」	S. 34	東京：不詳	○△	●三疊台目	③-2、⑥-6、29、⑧-28、29、岡田孝男『茶室平面集』1992
76		「湛浩庵」復元	S. 34～38	福岡：博多区千代	○△	●三疊半、文琳欄「宗湛好」、 「湛浩庵」 ●八疊	①-58、205～225、⑤-171v、⑥-4、32、36、38裏、⑧-31、37a～39a、70g～74g、76g～84g
77		鳳来寺茶室	S. 34	不明	○△	●四疊、向切、枱床 ●八疊 or ●七疊	⑧-30、36
78		松本邸茶室「藍泉庵」	S. 34	広島：福山市（不詳）	○△	●三疊台目 ●八疊	⑥-2、2裏、5、9、⑧-21表、岡田孝男『茶室平面集』1992
79		奥村邸増築	S. 35～36	不明	□	—	⑦-186k～219k、221k～223k、225k～231k、293t～295t、⑧-8、9、14～16、25
80	取止	成吉邸茶室	S. 35～36	東京：不詳	○△	●三疊台目「利休」 ●八疊「不白好」 or ●一疊半+台目四疊	④-32、34、⑧-23
81		八千代證券ビル 六階茶室	S. 35～37	東京：不詳	○△	●四疊	④-45裏、52～57、⑥-3、30裏、38、⑧-123k～138k
82		岸邸茶室	S. 36	京都：山科（不詳）	○△	●四疊	④-44、45、春子氏聞取り
83		後楽園 「利休堂」	S. 36	岡山：岡山市後楽園	○△	●五疊半+上段+内障「利休堂」	⑥-21、50、⑦-246m～256m、⑧-22、27
84		對泉院茶室	S. 36	八戸市（青森：八戸市新井田字寺ノ上か）	○	●四疊半台目「猿面席」 ●十疊+上段二疊「残月亭寫」	④-67～70
85	有	南宗寺 「実相庵」復元	S. 36	大阪：堺市南旅町東	○△	●二疊台目「実相庵」 ●八疊 ●八疊	④-35～40、⑧-96i～105i

86	平木邸茶室 (揚井邸茶室の移築か)	S. 36	東京：世田谷区世田谷	○△	●一畳台目向板、向切 ●四畳半	⑦-276q~281q、⑧-2
87	光明寺境内茶室	S. 37~38	京都：長岡京市栗生西条ノ内	○△	●六畳台目「碎啄斎好」	④-49、50、⑥-23、⑧-12、17、172n
88	橋本邸茶室	S. 37~39	和歌山：和歌山市（不詳）	○△	●三畳台目 ●三畳半「原双好」 ●八畳	①-239、240、④-42、⑥-7、18、44c~47表、48c
89	久恒邸茶室	S. 37	福岡：福岡市大塚（不詳）	○	●三畳台目 ●八畳	①-231~233、⑧-26、40b~43b、154l
		S. 51		×	—	
90	有 笛吹嘉一郎自邸	S. 38	京都：京都市北区紫野下築山町	□○△	●一畳台目中板、向切 ●六畳台目	①-234~238、⑧-75g
91	坂田泥華邸茶室 (萩焼陶工)	S. 38~39	山口：長門市深川湯本	○△	●三畳台目 ●四畳半	④-58~62
92	虎屋ビル二階茶室	S. 38	東京：不詳	○	●八畳半	④-41、⑧-33~35
93	吉水邸茶室（吉水宗白）	S. 38	京都：四條大宮（不詳）	○	●三畳台目	④-46、⑧-47c裏、春子氏間取り
紫野の自邸						
94	島本邸茶室	S. 39	和歌山：和歌山市（不詳）	○△	●三畳台目「少菴好」	④-47、⑥-23裏、43、⑧-1
95	有 二条城内茶室 「和楽庵」	S. 39	京都：京都市中京区二条通堀川 西入二条城町	○	●十畳+上段二畳「残月亭寫」	⑥-1、⑧-24、吉村氏間取り
96	富士屋ホテル 10階屋上茶室	S. 39	静岡：熱海（不詳）	○△	●五畳半 ●八畳 ●立礼：九畳程	④-65、66
97	地崎邸茶室	S. 40	北海道：札幌市（不詳）	○△	●四畳半台目 ●八畳	⑧-49d~51d
98	東光寺茶室	S. 40	京都：京都市上京区北野	○	●四畳半	④-48、春子氏間取り
99	池垣邸茶室 (医者)	S. 41	京都：京都市中京区新町通錦小 路上る百足屋町	○	●五畳	④-43、春子氏間取り
100	後藤喜久邸茶室	S. 41~43	岐阜：岐阜市中新町	○△	●四畳半台目 ●十畳	①-65、②-1~21、25~44
101	平岡基吉邸茶席	S. 41~42	静岡：清水市（不詳）	○△	●台目三畳中板、柗床「宗全好」	④-4~11、春子氏間取り
		S. 53（新席）		○	●一畳+台目三畳、柗床	
102	松坂屋 天満橋大飯店 七階茶室	S. 41	大阪：大阪市中央区天満橋京町	○△	●八畳「松風樓寫」	④-13~22
103	妙喜庵 玄関正面壁作替	S. 41	京都：乙訓郡大山崎町龍光	×	—	①-141、142
104	光悦寺茶室 (住職：山下)	S. 42	京都：北区鷹峯光悦町	○△	●三畳台目+礼拝畳+内陣	④-1~3、⑥-7、8、13裏、26、44
105	有 坂倉新兵衛邸 坂倉新兵衛邸 山の茶亭 (萩焼陶工)	不明 S. 42	山口：長門市深川湯本	□○△ ○△	●三畳台目 ●一畳中板+土間（立礼） ●四畳半	春子氏間取り、坂倉氏間取り、吉村氏間取り、実見 ④-28~31、春子氏間取り、坂倉氏間取り、吉村氏間取り、実見
106	角屋邸茶室中門	S. 42	京都：京都市下京区西新屋敷場 屋町	×	—	④-63、64
107	有田焼展示場 二階茶室 (今泉今右衛門)	S. 43	佐賀：不詳	○	●三畳半 ●四畳半	④-23~27、春子氏間取り
108	岡崎邸 池辺茶亭	S. 43	福岡：北九州（不詳）	○	●一畳台目向板、向切 ●立礼：六畳程	②-22~24
109	竹中邸 (竹中工務店)	S. 43~44（茶 室） S. 44（炭切場）	兵庫：芦屋（不詳）	○△ ×	●三畳台目 ●八畳「松風樓」 —	②-45~59、③-69
S. 44. 1. 30竣						

物件名判明・年代不明：アイウエオ順

番号	物件名	建築年	所在地	設計内容	茶室の形	図面通し番号・典拠
1	浅田邸	不明	東京：不詳	○	●三畳中板	岡田孝男『茶室平面集』1992
2	安部邸	不明	兵庫：芦屋（不詳）	○	●四畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
3	安部邸	不明	広島：福山（不詳）	○	●三畳、台目切	岡田孝男『茶室平面集』1992
4	石橋邸茶室 (ブリジストン)	不明	福岡：久留米市（不詳）	○	●二畳中板or二畳台目「利休好」 or三畳中板「如心斎好養庵寫」 ●六畳or六畳台目or八畳	①-105~108、⑤-135s、136s、岡田孝男『茶室平面集』1992
5	稲畑邸茶室改造	不明	京都：不詳	○	●三畳台目 ●六畳	⑤-85m、春子氏間取り
6	永楽邸水屋 (千家十職)	不明	京都：不詳	×	—	⑥-42裏
7	大谷邸 観月台	不明	山口：長門市深川湯本	○	●三畳半「原双」	⑤-118q、137s
8	岡本邸 残月写改造	不明	和歌山：不詳	○	●八畳+上段二畳「残月寫」	①-60
9	神田邸茶席	不明	山口：柳井（不詳）	○	●三畳中板「養菴寫」 ●八畳「如心斎好」	⑤-148t
10	京都女学校同窓会館 屋上茶室	不明	京都：東山七条（不詳）	○	●二畳台目向板、逆勝手向切 ●四畳半 ●十畳	⑤-142s、春子氏間取り
11	小西邸改築 (小西酒造か)	不明	兵庫：伊丹（不詳）	□○	●十畳+上段二畳「残月亭寫」 ●二畳台目or二畳か	⑤-115q
12	小西邸	不明	兵庫：伊丹（不詳）	○	●一畳台目、向切逆勝手	岡田孝男『茶室平面集』1992
13	榊原温泉	不明	三重：久居市榊原町	◇	—	①-97~101、⑤-3a、春子氏間取り
		不明（清安荘）		◇	—	⑤-116q、117q
14	坂野邸	不明	山口：不詳	○	●三畳台目	岡田孝男『茶室平面集』1992
15	佐藤邸茶室	不明	大分：別府（不詳）	○	●四畳向板、向切「遠州好寫」	①-112
16	佐藤氏新興生活館 四階茶室	不明	不明	○	●四畳半 ●八畳	①-113
17	自笑庵	不明	大阪：泉大津（不詳）	○	●四畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
18	順照寺改築	不明	京都：四條（不詳）	□○	●六畳	⑤-123q、春子氏間取り
19	松籟荘 「三径庵」「踏青亭」	不明	大阪：不詳	○	●三畳、台目切 ●三畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
20	白井半七邸 (陶工)	不明	不明	□○	●四畳半	⑤-74j、119q、121q
21	白井邸	不明	兵庫：伊丹（不詳）	○	●四畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
22	白川邸茶室	不明	山口：宇部市（不詳）	○	●三畳中板	⑥-20
23	赤目千年瀬 茶店 瀧見亭	不明	三重：赤目（不詳）	○◇	●四畳半台目、壁床	①-70、71
24	三昧堂	不明	不明	×	—	⑤-152t

25	大同公園茶室	不明	中国：新京（不詳）	○	●一畳台目向板、逆勝手向切 ●三畳台目「利休好」 ●六畳台目	⑤-4a、春子氏間取り
26	田村邸庭園内茶亭	不明	不明	○	●台目五畳、向切	⑤-140s
27	徳重吉富 （京菓子司）	不明	京都：今出川室町上ル	○	●不詳	春子氏間取り
28	丹羽邸	不明	京都：不詳	○	●四畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
29	外山邸手洗所	不明	大阪：堺市浜寺（不詳）	×	—	①-62、春子氏間取り
30	永井邸改造	不明	大阪：豊中市（不詳）	□○	●四畳 ●九畳	①-115、⑤-141s、146s、147s
31	中崎邸「瓢箪」	不明	市川市（不詳）	○	●三畳中板	岡田孝男『茶室平面集』1992
32	中村邸茶室	不明	不明	○	●六畳台目	①-93
33	長屋門附入母屋造住宅	不明	不明	□	×	①-50
34	南禅院茶室	不明	不明（京都：京都市左京区南禅寺福地町か）	○	●七畳「後水尾院御茶室寫」	⑤-120q
35	西尾邸「芥舟」	不明（嘉一郎35歳の頃）	京都：京都市北区小山東大野町	□○	●三畳台目	岡田孝男『茶室平面集』1992、春子氏間取り
36	西川佳舟邸 （画家）	不明	不明	□○△	●四畳、枳床 ●八畳	①-80
37	西垣邸	不明	大阪：東豊中（不詳）	□○	●一畳台目向板、向切 ●二畳台目「庭玉軒寫」 ●十畳+上段二畳「残月亭寫」	①-102~104
38	林邸	不明	京都：不詳	○	●三畳半	岡田孝男『茶室平面集』1992
39	林邸「静庵」	不明	京都：不詳	○	●三畳台目	岡田孝男『茶室平面集』1992
40	原田邸	不明	大阪：東豊中	○	●四畳、枳床	①-76、77
41	東豊中住宅地二六号地	不明	大阪：東豊中	□○	●四畳、枳床「吸江斎好」 ●八畳	①-75
42	平山専務邸改増築	不明	東京：武蔵野市吉祥寺	□	—	①-23
43	福田別邸茶室	S.20以前	大阪：不詳	○	●三畳台目「原双好」	①-81、岡田孝男『茶室平面集』1992
44	へ号	不明	不明	□○	●三畳台目 ●九畳	⑤-113q、122q、125q
45	松崎氏席	不明	東京：不詳	×	—	⑤-43c
46	宮惣	不明	広島：不詳	○	●三畳中板	岡田孝男『茶室平面集』1992
47	森邸	不明	兵庫：芦屋（不詳）	○	●三畳台目	岡田孝男『茶室平面集』1992
48	森下邸茶室	不明	兵庫：甲陽園（不詳）	○	●三畳中板	⑤-69i、岡田孝男『茶室平面集』1992
49	森本氏依頼茶室	不明	三重：伊賀（不詳）	○	●四畳半台目 ●六畳	⑧-4
50	山口邸	不明	大阪：大阪市中心区淡路町	□	—	⑤-134s、138s
51	山口氏席	不明	不明	×	—	⑤-43c
52	山口邸茶室	不明（S.33以	羽衣（不詳）	○	●三畳台目「覺々斎好」	⑥-27、41
53	山口邸茶席	不明	広島：広島市（不詳）	○	●三畳台目 ●八畳	①-118、岡田孝男『茶室平面集』1992
54	山口別邸	不明	山口：長門市深川湯本（不詳）	□○	●四畳半	①-119
55	元 山口邸茶室改造	不明	山口：長門市深川湯本（不詳）	○	●四畳台目	④-51
56	山中邸	不明	兵庫：伊丹（不詳）	□○	●不詳 ●八畳台目向板、向切	①-123、124
57	横田邸	不明	東京：不詳	□○	●三畳 ●三畳半 ●八畳台目	①-88、89
58	霊龜山参拝堂 （大河内山莊持仏堂か）	不明	京都：京都市右京区嵯峨か	×	—	⑤-64h、65h、83m、150t

表注

「茶席」、「茶室」、「数寄屋」、「数寄家」などの表記は、基本的に図面表記に従ったが、同物件内に左記の名称が混在しているものもある。

「取止」は図面上に「取止め」などの記入が見られ、実施に至らなかったと考えられるものを示す。

典拠の性格上、茶室の件数が若干多い傾向があるが^{注20)}、物件単位の図面史料が充実しているものも多く、先に述べたように建物の図面表記に比べ庭の表記は比較的簡単なものであることなどから、住宅や庭の割合はそれほど増えないと予想される。つまり、嘉一郎は住宅、茶室、庭、商業施設などの設計も行っていたが、茶室設計の専門性が高いと言えることが出来よう。

「好み」と「写し」

他のジャンルの建築と比較すると、「好み」や「写し」の概念は、茶室らしい特徴として挙げる事ができる。「好み」には任意の茶室を好んだ人物を、「写し」には物としての任意の茶室の名称がそれぞれ「一好み」、「一写し」のようにその対象として示される。しかし、「好み」であること、「写し」であることそれぞれの境界線はあいまいである。例えば又隠や不審菴などは、様々な写しのバリエーションが存在し、写しであるかないかという境界は曖昧である。そのため、ここでは嘉一郎が図面上に「一好」、「一寫」と直接に文字で明記したもののみピックアップした。表2の〈茶室の形〉の欄中に「」内に、嘉一郎の表記通りに表した「一好」、「一寫」がそれである。

まず、表2にいくつか示したように、嘉一郎図面には「一好一寫」

などの表記が見られ、嘉一郎にとって「好み」と「写し」の概念は一つの茶室の中で共存していることがわかる。このことは、嘉一郎が、物としての茶室と、それを好んだ人物との関係性を強く意識していることを示すものであろう。

では、「好み」の対象人物、「写し」の対象茶室（本歌）はそれぞれどのような特徴を読み取ることができるであろうか。以下に数量的に考察する。茶室数全242室中、「好み」は38室、「写し」は19室確認できる。^{注21)}「好み」の内訳を見ると原叟（原双、覺々斎）が15室でとびぬけて多く、遠州、如心斎、啐啄斎が各3室で、利休、有楽斎、吸江斎、即中斎が各2室で並ぶ。1室のみ確認できるのは江岑、桑山、不昧、宗湛、不白、少庵、宗全である。「写し」は残月亭が7室でとびぬけて多く、如庵、忘筌、養庵がそれぞれ2室で並ぶ。1室のみ確認できるのは山雲床、又隠、松風楼、庭玉軒である。また、茶室名でなく「遠州好寫」、「後水尾院御茶室寫」などと茶室名の記入がなく「寫」と表記されているものも確認できる。なお、表記はなくても又隠、不審菴、残月亭などの写しと思われるものは多く、また、「一好」、「一写」の表記が見当たらずとも、上記に数えた表記されたものとほぼ同じプランも多数含まれるため、上記の数は更に多く見積もる必要がある。

「好み」の対象となる人は、施主や設計者との関わりに左右されることが多いが、江岑、原叟、如心斎、啐啄斎、吸江斎、即中斎は表千家の家元であり、不白や宗全も表千家との関わりが深い。全38室中28室という半数以上が表千家関連の人物の好みとなっている。続いて、「写し」の対象を見ても、残月亭、松風楼、養庵と、全19室中10室が表千家と特に関わりの深い茶室で占められており、好みと同様、表千家という流派の傾向をみることができる。

5. まとめ

以上、近・現代の茶室建築史において重きをなしたと考えられる笛吹嘉一郎の、これまで把握されていない文献・図面史料、聞き取り調査を通じてその職能の把握と建築作品の全体的把握を試みた。

嘉一郎の職能には大工棟梁としての木材加工や現場の指揮だけでなく、建築設計・製図も含まれていた。そして、その設計対象は、住宅、茶室、庭、商業施設などが見られたが、茶の施設に専門性が見られ、中でも特に大工仕事を中心的な対象とした設計であった。このように、嘉一郎の設計対象の核として捉えられる茶室の設計内容には「好み」や「写し」がそれぞれ38件、19件みられ、「好み」や「写し」を実現できること自体一つの職能であることが示唆される。そして、その「好み」や「写し」の対象からは、表千家という流派の傾向が見られたが、それは施主の傾向と同時に嘉一郎の職能としての専門性を指摘することが出来る。

嘉一郎の作品数167件という量、全国的な作品分布からは、以下のことが示唆される。

近代における職人世界の変化は、株仲間の廃止と職業組合の誕生^{注22)}、請負業者や建築家の参入による下部組織への再編入^{注23)}などが明らかにされている。それは、近世の職人世界に多く見られた出入りと仲間の制度から自由になり、新たな枠組みの中での職人世界の再構築ではあったが、建築家に上部組織を奪われたものであった。

嘉一郎も、戦前はそのような営業の自由とともに、全国的に数多くの茶室を手がけてきたと想定される。しかし、戦後は表千家家元との結び付きが強くなり、いわゆる「出入り」^{注24)}の数寄屋師となる。建築世界において上記の再編入が加速する中、嘉一郎にとって家元を中心とした職人世界は、建築家中心の近代建築界からの避難場所であっただけでなく、「数寄屋師」として生きていく上での「厳しさ」を追求できる場所であったと考えられる。そこには、職人世界の人々が、自ら近代的な職人へと積極的に再構成していく中での、「数寄屋師」という職能が示唆されるだけでなく、当時進行していた建築世界の「近代化」で見過ごされた職人たちのもう一つの「近代」があったと捉えることができるのではないだろうか。中村博士の言及する、建築家でもなく数寄屋大工でもない「数寄屋師」の独自性はこのあたりにあると思われる。嘉一郎の行動の軌跡とともに、今後も考究したい。

以上、本稿では近・現代における茶室の設計者として一つの柱ともなる笛吹嘉一郎の建築活動の輪郭を明らかにした。

謝辞 本研究は住宅総合研究財団の助成に多くを助けて頂きました。そして、笛吹春子氏、吉村龍三氏、田尻晶英氏に多大な協力を頂きました。記して謝意を表させていただきます。

注

^{注1)} 松本康隆「3代木津宗詮の職能と茶室の全体的把握のための基礎的研究」『日本建築学会計画系論文集』第602号、191-198、2006.4。その他、木津宗詮の茶室に関しては、松本康隆「大宮御所と秋亭亭」『日本建築学会大会学術講演梗概集』9126、2005。

^{注2)} 中村昌生『数寄の工匠』淡交社、1986

^{注3)} 松本康隆・登根麻子「大河内山荘について」『日本建築学会近畿支部 研究報告集』9045、2003

^{注4)} 松本康隆・吉田高子「雅俗山荘の茶室と茶会について 小林一三の茶室に関する研究 その1」『日本建築学会近畿支部 研究報告集』9021、2000。松本康隆・吉田高子「小林一三の茶室とその茶風」『日本建築学会大会学術講演梗概集』9061、2000。松本康隆・吉田高子「小林一三と笛吹嘉一郎の茶室「福寿荘」」『日本建築学会大会学術講演梗概集』9179、2001。

^{注5)} 日向進・矢ヶ崎善太郎・松本康隆「茶人木津宗詮と数寄屋大工笛吹嘉一郎による茶室の研究」『研究年報 No. 30』住宅研究財団、2004

^{注6)} 日向他「茶人木津宗詮と数寄屋大工笛吹嘉一郎による茶室の研究」(注5に同じ)

^{注7)} 笛吹春子氏(昭和4年生まれ)

^{注8)} 笛吹家過去帳より

^{注9)} 中村『数寄の工匠』(注2に同じ)によると、江戸時代末から明治にかけて活躍した平井家三代儀助は、みずから「数寄屋師」を称していたらしい。

^{注10)} 資料の裏づけは取れていないが、嘉三郎は、笛吹家の養子になり、笛吹家を継ぐと同時に平井家のもとを離れたのではないかと考えられる。

^{注11)} 田尻玄之助(M.44-S.57)の長男(現:田尻工務店の代表)。玄之助は4代木津宗詮のもとで活躍した大工棟梁で、田尻工務店を立ち上げた。田尻工務店所蔵の「藤田御氏東邸茶室設計図」には「S.29.9.笛吹氏設計建築ニ依ルモ移築ノ為昭和49.3.12.之ヲ寫ス 解体予定」とあり、藤田家の茶室移築工事を行う関係で、笛吹嘉一郎図面を玄之助が描き写したものと実測図面と考えられるものが存在する。現時点で、田尻工務店所蔵図面に含まれる笛吹嘉一郎関連のものは、これら旧藤田東邸の茶室図面5点のみ明らかであり、この5点を本稿で扱う図面史料に数える。

^{注12)} 笛吹家所蔵の史料は建築図面を中心とした史料であるが、若干の茶道具の図や茶会記、手紙や見積書なども含まれており、先の点数に入れている。以下に分類方法について詳述する。

笛吹家所蔵の図面史料はA1サイズの木箱2つ、A2サイズの木箱2つにそれぞれ整理収納されたものや、整理されず丸めて、或いは折畳まれているもの、いくつかの物件ごとにA4サイズの封筒へ折り畳まれて整理されているものなどがある。

史料を筆者が整理する以前、どのように整理・使用・保存されていたのか、また、以後の史料の紛失を明らかに出来るよう、まず、以下のように史料1点1点に番記号を付した。A1サイズの木箱をそれぞれ①、②とし、当初の状態がわかるよう、上から順に通し番号を付した(①-1~240、②-1~59)。次にA2サイズの木箱も同様に番号を付した(③-1~73、④-1~82)。複数に丸められていた図面は、その単位がわかるようアルファベットa~z、aa~eeを付した(⑤-1a~187ee)。折り畳まれていた図面は木箱図面と同様に番号を付した(⑥-1~52)。最後に、封筒に収納された図面は、笛吹家からお預りした順に⑦、⑧図面とし、封筒の単位ごとに⑤図面と同様のアルファベットを付した(一部封筒に入っていない図面も含んでいるが、それにはアルファベットを付していない)(⑦-1~298u、⑧-1~191p)。

上記の図面を以下の7つに分類した。7つのグループそれぞれに史料の点数及び物件数を示したが、以下に表した史料の点数の合計が上記の計1187点より少し多いのは、紙の裏表両面に描かれた図面史料が存在するためである。以下の分類では1枚の図面でも、裏と表両面に描かれたものは、それぞれを1点と数える。また、今回数に入れた図面史料はほとんどが嘉一郎によるものであるが、嘉一郎によるものか巖によるものか判別し難いもの、及び物件名を同じくして嘉一郎図面と巖図面が混在して収納されているものがあつた。双方とも、物件として嘉一郎関わった可能性が高く、各物件の情報としてまとめる整理の都合上、最後に分類した「巖図面」には含めず、嘉一郎の物件として取り扱うことにした。なお、分類は現時点で判別出来た上での分類であり、今後の移動がありうる。物件数に関しても重複がある可能性がある。「物件判明・年代判明」としたのは867点、104件である。ここには図面上に施主名もしくは物件名、或いはそれと思われる記載がなされ、かつ、年月日が明記されているものを分別した。(一部、記載はないが、他の資料から判別できたものも含む。以下同じ)

「物件名判明・年代不明」には73点、42件。ここには、物件名が記載されているが、年代が記載されていないものを分類した。

「物件名不明・年代判明」には15点、14件。物件名が記載されていないが、年代が記載されているものを分類した。

「物件名不明・年代不明・地域判明」には6点、6件。物件名、年代とも記載されず、不明であるが、「和歌山市某茶室設計図」、「台郷某氏茶室設計図」など地域名だけ判別できるものを分類した。

「不明物件」は103点、83件。物件名、年代、地域とも不明な、一つの完結した物件や部分的な建築図面をここに分別した。

「その他」としたのは114点。「高松宮殿邸離殿平面図」や「清水谷御数寄屋古図ニ依ル平面図」、「立禮基子設計図」、「領収書」など、明らかに嘉一郎作品でない建築図面や、嘉一郎の作図や記述であるが茶道具や領収書など、建築図面以外のものをここに含めた。

「巖図面」は56点、21件。ここには、巖単独の仕事と考えられるものを含

めた。嘉一郎と同時期のものや时期的には嘉一郎歿後であるが同物件（増改築などのため）と考えられるものは、物件別の整理の都合上、嘉一郎図面のものの中に含めている。また、ここに分類して明記した以上に巖図面は多数存在するが、現時点では巖図面単独で整理されているものを史料数に入れていない。

注13) 日向他「茶人木津宗詮と数寄屋大工笛吹嘉一郎による茶室の研究」（注5に同じ）

注14) 春子氏によると、西尾真とは、表千家家元の信任厚い、茶道教授とのこと。生形貴一は表千家茶道教授で、小林一三をはじめ、関西の著名な数寄者を数多く弟子にもった人物。そして、徳禅寺和尚とは、故大亀老師とのことであった。

注15) 春子氏によれば、西尾真のもとで15歳の時から茶道の稽古をはじめていたとのことである。

注16) 春子氏の記憶によると、自邸茶室「無孔庵」は、自邸内の仕事場の移転に伴い、空いたスペースに建てた茶室とのこと。そして、その仕事場の移転について、資料的裏付けはとれていないが、春子氏が聞いている記憶によると、昭和2年頃らしい。また、茶会の亭主は嘉一郎、亭主の補佐に嘉一郎の妹、水屋には嘉一郎の茶道の師である西尾真に入ってもらい、嘉一郎夫人は料理人の補佐をしていたとのこと。

注17) 後に、嘉一郎の設計によって「洞雲庵」が建てられるとともに、会の名称も「洞雲会」となったとのこと。

注18) 松文商店の元常務。大正15年生まれ。

注19) 表には左端から、〈番号〉、〈現状〉、〈物件名〉、〈建築年〉、〈設計者〉、〈所在地〉、〈設計内容〉、〈茶室の形〉、〈図面通し番号・典拠〉の欄を設けた。〈現状〉には、存在を確認できたものに「有」、取り壊されたものに「無」と記入した。〈物件名〉には物件の名前を記入し、著名人など補足的な説明を（）内に記入した。〈建築年〉は判明する限り記入し、図面上に複数年の記述が確認

できる場合は設計・施工期間と考えそのまま複数年を記入した。〈所在地〉は判明する限り都道府県と市町村名を記入した。所在地情報が全くないものは「不明」とし、情報量が少しあるがピンポイントで判明しないものについては、情報が書かれた当時と地名が変更している場合もあるので情報源の表記のまま記入し、「（不詳）」と付した。〈設計内容〉には判明する限りであるが、住宅及び別荘は「□」、茶室は「○」、庭は「△」、商業施設は「◇」、その他もしくは不明なものは「×」で表記した。〈茶室の形〉には、「●」で確認できる茶室の数を把握できるようにし、続いて茶室の形を略記した。〈図面通し番号・典拠〉には、図面があればまず図面を、そしてその他の史料などを記載した。なお、現時点では図面史料の分類と同様、物件の重複記載は避けられない。

注20) 図面史料の情報が断片的なだけでなく、例えば岡田孝男『茶室平面集』学芸出版社、H.4の情報は茶室の略平面図のみとなる。

注21) 「利休三帖大目茶席」と表記されていて「利休好み」であると想定されるもの、「残月亭」とのみ表記されていて「残月亭写し」であると想定されるものなどは表2中に「利休」、「残月亭」などと表記したが、「好」及び「寫」の文字が確認できないため、ここで数えた「好み」、「写し」の数には入れていない。また、著名な茶室と形態的に似ていて「写し」であると想定されるものも、「好」及び「寫」の文字が確認できなければ数に入れていない。

注22) 西和夫『工匠たちの知恵と工夫—建築技術史の散歩みち』彰国社、1980

注23) 初田亨『職人たちの西洋建築』筑摩書房、2002

注24) 中村『数寄の工匠』（前掲注2）にも「特に表千家との接触が密となり、やがて世間からは表千家の専属のごとくみられるようになった」と述べられており、一般的に表千家の「出入り」であるという認識があったと考えられる。

（2006年1月10日原稿受理、2006年9月1日採用決定）